

令和二年度入学者選抜学力検査問題

十三時—十四時三十分

地域デザイン科学部志願者

コミュニケーションデザイン学科を志願し、国語を

選択した者

農学部志願者

農業経済学科を志願し、国語を選択した者

国語(国語総合)

(本文 11ページ)

〔注意〕

1. 検査開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
2. 「受験番号」は、解答用紙の受験番号欄に忘れずに記入すること。
3. この冊子には、三問題ある。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所があった場合は、申し出ること。
4. 解答は、必ず解答用紙の所定の解答欄に記入すること。所定の欄以外に記入したものは無効である。

## 第1問

次の文章は小説家・三島由紀夫が一九六七年に発表した「いかにして永生を？」という芸術論エッセイである。これを読  
んで後の問いに答えよ。

(この部分は、著作権の都合上、公開できません)

(この部分は、著作権の都合上、公開できません)

(この部分は、著作権の都合上、公開できません)

(三島由紀夫「いかにして永生を？」による。なお設問の都合で原文を一部改変したところがある。)

注1 サラ・ベルナルルⅡ美貌と演技で名声を得たフランスの舞台女優(一八四四—一九二三)。

注2 九代目團十郎Ⅱ明治期に活躍した歌舞伎役者・九代目市川團十郎(一八三八—一九〇三)。「劇聖」と崇められた。

注3 プレザンスⅡ存在。現存。

注4 永井荷風の「断腸亭日乗」Ⅱ作家・永井荷風(一八七九—一九五九)が一九一七年から一九五九年まで書き続けた日記。後世に残すことを意識して書かれており、生前から部分的に公刊されていた。

注5 モータルⅡ死ぬべき運命の。必滅の。

注6 「さまよえるオランダ人」Ⅱ神罰によって永遠に海上をさまよう幽霊船伝説のオランダ人船長。この幽霊船伝説はリヒャルト・ワーグナーの同題名の歌劇(一八四三年初演)としても知られる。

問 1 傍線部①～⑤のカタカナを、それぞれ漢字で記せ。

問 2 傍線部⑦の「そういう目的」とはどのような目的か、簡潔に説明せよ。

問 3 傍線部①「天衣無縫」の語義を記せ。

問 4 傍線部⑨「荷風の『断腸亭日乗』は一行も告白などをしていない」と筆者が考えるのはなぜか、簡潔に説明せよ。

問 5 傍線部⑤「そのような義務」の内容を具体的に説明している部分を、本文中からそのまま抜き出せ。

問 6 傍線部④「読者の立場」に立ったとき、文学作品の永生について、筆者はどのように考えているか、わかりやすく説明せよ。

第2問 次は、山本周五郎の小説『さぶ』（一九六三年）の一節である。読んで、後の問いに答えよ。

小雨が霽もやのようにけふる夕方、(注1)兩國橋を西から東へ、さぶが泣きながら渡っていた。

(注2)双子縞ふたごじまの着物に、(注3)小倉の細い角帯、色の褪あせた黒の前掛をしめ、頭から濡ぬれていた。雨と涙とでぐしょぐしょになった顔を、

ときどき手の甲でこするため、眼のまわりや頬が黒く斑まだらになつてゐる。ずんぐりした軀からだつきに、顔もまるく、頭が尖とがっていた。

——彼が橋を渡りきったとき、うしろから栄二が追つて来た。こつちは瘦やせたすばしっこそうな軀からだつきで、おもながな顔の濃①いマユと、小さなひき緊しまつた唇が、いかにも賢さとしそうな、そしてきかぬ気の強い性質をあらわしているようにみえた。

栄二は追いつくとともに、さぶの前へ立ち塞ふさがった。さぶは俯うつむ向むいたまま、栄二をよけて通りぬけようとし、栄二はさぶの肩をつかんだ。

「よせつたら、さぶ」と栄二が云つた、「いいから帰ろう」

さぶは手の甲で眼を拭ぬぐき、咽むせびあげた。

「帰るんだ」と栄二が云つた、「聞えねえのか」

「いやだ、おら葛西かさいへ帰る」とさぶが云つた、「おかみさんに出ていけて云われたんだ、もう三度めなんだ」

「あるきな」と云つて栄二は左のほうへ顎あごをしやくつた、「人が見るから」

二人の少年は橋のたもとを左へ曲つた。雨は同じような調子で、殆ほとんど音もなくけぶっていた。

「おらほんとに知らなかったんだ」とさぶが云つた、「ゆうべ粉袋を戸納とだなへしまつたときに、勝手に使つかうから一つ出しておけて、おかみさんに云われた、だから一つだけ残のこしといたんだ、そしたらその袋が出でしつ放はなしになつて、おかみさんは使つかつたあとでしまつとけて、その袋を返したのに、おれがしまい忘わすれたつていうんだ」

①「癖くせだよ、癖くせじゃねえか」

「粉が湿ぬ気をくつちやつた、へまばかりする小僧たらしまだつて」さぶは立停たちどつて、手の甲で眼のまわりをこすりながら泣いた、「——」

おら、返してもらわなかった、そんな覚えはほんとにねえんだ、ほんとに知らなかったんだ」

「癖だつてば、おかみさんはなんとも思っちゃあいねえよ」

「だめだ、おら、だめだ、ほんとにとんまで、ぐずで、——自分でも知ってた、とても続けられやしねえ、もうたくさんだ」さぶは喉を詰らせた、「おら、思うんだが、いつそ葛西へ帰って、百姓をするほうがましだつて」

広い河岸通りの、右が武家屋敷、左が大川で、もう少しゆくと横網になる。折助とも人足ともわからない中年の、ふうていの

よくない男が二人、穴のある傘をさして、なにかくち早に話しながら、通りすぎていった。その男たちの、半纏の下から出てくる裸の脛が、栄二にはひどく寒そうにみえた。さぶはあるきだしながら、小舟町の「芳古堂」へ奉公に来てから三年間の、休む

② ヒマもなくあびせられた小言と嘲笑と平手打ちのことを語った。それは訴えの強さではなく、赤児のなが泣きのような、弱よわしく平板なひびきを持っていた。大川の水がときたま、思いだしたように石垣を叩き、低い咬ぎの音をたてた。

「奉公が辛いのはどこだつておんなしこつた、おかみさんの口の悪いのは癖だし」と栄二はつかえつかえ云つた、「それにおめえ、女なんでもともと、——車だ」

栄二がさぶの腕に触り、二人は立停つて川のほうへよけた。からの荷車を曳いた男がうしろから来て、二人を追いぬいていった。

「腕に職を付けるのは辛えさ」と栄二は続けた、「考えてみな、葛西へ帰つたつて、朝から晩まで笑つてくらせやしねえだろ、それとも百姓は後生樂か」

「葛西のうちなら」とさぶが云つた、「出ていけなんて云われることだけはありやしねえ」

「ほんとにそうか」

③ さぶは返辞をしなかった。栄二も返辞を期待していなかった。さぶは葛西にある実家のことを考えてみた。腰の曲つた喘息持ちの祖父、気の弱い父と、男まさりで手の早い母、朝から母と喧嘩の絶えない口やかましい兄嫁、三人いる弟妹と、呑んだくれの兄と、五人もいる甥や姪たち。うす暗く煤だらけな、古くて狭くて、ぜんたいが片方へ傾いている家や、五反歩そこそこの瘦

せた田畑など。さぶはトホウにくれ、しゃくりあげながら、またあるきだした。

「おめえにゃあ田舎がある」いっしょにあるきながら栄二が云った、「どんなうちにしる帰るところがあるからいい、だがおらあ親きようだいも身寄りもねえ独りぼっちだ、今年の春、おらあ店を追ん出されるようなことをしちまった、追ん出されるか自分でおん出るか、どっちか一つという、とんでもねえことをしちまったんだ」

さぶはそろそろと振り向いて、栄二の顔を見た。好奇心からではなく、戸惑ったような眼つきであった。栄二はふきげんな、怒つてでもいるような口ぶりで、自分が去年から幾たびか帳場の銭をぬすみ、それを主婦のお由にみつかったのだ、と告白した。

「わこく橋の側の堀つぶちに鰻の蒲焼のヤタイが出る」と栄二は続けた、「おらあ蒲焼の匂いを嗅ぐとがまんができなくなるんだ」

通りがかりにその匂いを嗅ぐと、喰べるまでは胃の腑がおさまらない。気持もおちつかず、することが手につかない。まるで病気のようになってしまう、ときには手足がふるえだすことさえあった。帳場の銭箱から銭をつかみ出したのはそういうときで、去年の秋から十二、三たび盗みだしたろうか、食いたい一心で悪いことをしたとは思わなかった。それがこの二月、主婦のお由にその部屋へ呼ばれた。

「おかみさんは小言は云わなかった」と栄二は泥でも嘔むように、顔をしかめながら云った、「——去年の八月五日と、昨日、おまえが帳場でやったことをあたしは見たよ、もうあんなことはおよし、欲しかったらあたしがあげるから、あたしのところへそう云っておいで、って——それっきりだった」

お由は二度だけしか見なかったのだろうか、それともすっかり知っていて、わざと知らないふうをよそおったのか、いずれにせよ、栄二は死ぬほど恥じ、もう店にはいられないと思った。自分をぬすつとだなどは考えもしなかったが、銭箱から銭をつかみだした自分の姿が、あさましくて恥ずかしくて、そのまま店にいる気になれなかったのだ。

「だが、店をとびだしてどこへゆく」と栄二は続けた、「おらあ八つの年、大鋸町で夏火事にあい、両親と妹に焼け死なれた、

おれ一人は白魚河岸へ釣りにいって助かったが、ほかに身寄りは一軒もなかった、おやじは伊勢から出て来たと言ったが、伊勢のどこだかおらあ覚えちゃあいねえし、覚えていたって頼ってゆけるもんじゃあねえ、おらあそのときくれえ自分にうちねえことが悲しかったことあなかった」

「知らなかった、おら、ちつとも知らなかった」とさぶが呟いた、「——それで栄ちゃんは、がまんしたんだね」

「錢も二度とはぬすまなかった」

二人は横網の河岸まで来てい、さぶが立停つて、地面をみつめ、濡れて重くなった草履の先で、地面を左右にこすつた。

「おら、思うんだが」と彼は心のきまらない口ぶりで云つた、「——小さいじぶんおふくろにぶたれたことがある、弟のやつがいたずらをして、それをおれがしたもんだと思つてぶつた、おら、泣きながらおれのしたことじゃあねえって云つて、それから、弟のしたことだとわかつたとき、おふくろは平気な顔で云つた、それじゃあおまえはこれまでに、ぶたれるようなことは一度もしなかつたっていうのかい、つてさ」

「女なんてそんなもんだ」と栄二が云つた、「撫でた手でつねるし、つねった手で撫でるようなことをする、そしてどつちもすぐに忘れちまうんだ、——少しはおちついたか、さぶ、もうここいらで帰つてもいいだろう」

さぶは不決断にううと云つた。

「ありがと」とさぶはよく聞きとれない声で云つた、「ごめんよ、栄ちゃん」

「こんどは黙つてとび出さねえでくれよ」と栄二は云つた、「これからはなんでもおれに相談してくれ、力になるからな」  
さぶはゆつくりと頷いた。

(山本周五郎の文章による。なお設問の都合で原文を一部改変したところがある。)

注1 両国橋Ⅱ東京の、隅田川下流にかかる橋。

注2 双子縞Ⅱ双糸(二本の糸を撚り合せた糸)を使用した縞柄の織物。

注3 小倉こくらの細い角帯かくおび|| 小倉織こくらおりの男帯。

注4 大川おほがわ|| 隅田川すみがわの下流しもの通称。

注5 折助おりすけ|| 江戸時代、武家ぶけで下働きしもがしをする男性おとこの異称。

注6 人足ひとぞく|| 土木工事どぶろく・荷役にんぞくなどの力仕事ちからをする労働者らうどうしや。

注7 後生ごせい樂らく|| 心配事しんぱいじがあつても苦くるにせずなのんきんきでいるさま。

注8 反歩たんぷ|| 田畑たんぱの面積めんせきを反たんを単位たんとして数えるかずるのに用いる語ことば。五反歩ごたんぷは五反ごたんのこと。

問1 傍線部①～⑤のカタカナは漢字で、漢字はその読みをひらがなで、それぞれ記せ。

問2 傍線部ア「咽むせびあげた」とあるが、さぶはどのような様子で泣ないていたのか、言葉の意味に留意して説明せよ。

問3 傍線部イ「癖くせだよ、癖くせじゃねえか」とあるが、栄二はさぶにどのようなことを伝えたくてこう言ったのか、わかりやすく説明せよ。

問4 傍線部ウ「さぶは返辞へんじをしなかった。栄二も返辞へんじを期待きたいしていなかった」とあるが、それはなぜか、二人の心情をそれぞれ説明せよ。

問5 傍線部エ「好奇心こうきしんからではなく、戸惑とまどったような眼つきまなづきであった」とあるが、この時のさぶの心情はどのようなものであったか、説明せよ。

問6 「さぶ」と「栄二」はどのような関係として描かれているか。全文を通読して考えたことを自由に述べよ。

### 第3問

次の説話を読んで、後の問いに答えよ。

(注1) 嵯峨天皇と弘法大師と、つねに御手跡をあらそはせ給ひけり。或時、御手本をあまた取り出させ給ひて、大師に見せまらせられけり。その中に殊勝の一巻ありけるを、天皇仰せごとありけるは、「これは唐人の手跡なり。その名を知らず。いかにもかくは学び難し。めでたき重宝なり」と、しきりに御秘蔵ありけるを、大師よくよくいはせまらせて後、「これは空海がつかうまつりて候ふものを」と奏せさせ給ひたりければ、天皇さらに御信用なし。おほきに御不審ありて、「いかでかさる事あらん。当時書かるる様に、はなはだ異なるなり。」はしたてもおよぶべからず」と勅定ありければ、大師、「御不審まことにその謂候ふ。軸をはなちて、あはせ目を観覧候ふべし」と申させ給ひければ、すなはちはなちて御覧するに、「その年その日、青龍寺にて之を書す、沙門空海」と記せられたり。天皇この時御信仰ありて、「誠に我にはまさられたりけり。それにとりて、いかにかく当時のいきほひにはふつとかはりたるぞ」と尋ね仰せられければ、「その事は国によりて書きかへて候ふなり。唐土は大国なれば、所に相応していきほひかくのごとし。日本は小国なれば、それにしたがひて当時のやうをつかうまつり候ふなり」と申させ給ひければ、天皇おほきに恥ぢさせ給ひて、そのちは御手跡あらそひなかりけり。

(古今著聞集「より」)

注1 嵯峨天皇（注1）第五十二代の天皇。書芸に優れ、空海・橘逸勢とともに「三筆」と称された。

注2 弘法大師（注2）空海の諡。唐（中国）に渡海して仏教を学び、高野山に寺院を建立し、真言宗の開祖となった。

注3 青龍寺（注3）唐の長安にあった寺。空海は青龍寺で学んだ。

注4 沙門（注4）出家して修行を実践する人々。

問1 傍線部㉞「大師よくよくいはせまゐらせて」とあるが、誰が誰にどのようなことを言わせたのか。わかりやすく説明せよ。

問2 傍線部㉟「奏せさせ給ひ」は「奏せ」「させ」「給ひ」の三語に分けられる。それぞれの語の活用形、敬語の種類、敬意の対象を答えよ。なお、活用形は「未然」「連用」「終止」「連体」「已然」、敬語の種類は「尊敬」「謙譲」「丁寧」、敬意の対象は、「天皇」「大師」「唐人」から選んで答えること。

問3 傍線部㊱「いかでかさる事あらん」を現代語訳せよ。

問4 傍線部㊲「はし」の語義として、次のa、b、c、d、eの選択肢からもっとも適切なものを選び、アルファベットで答えよ。

- a、橋
- b、箸
- c、端
- d、梯子はしこ
- e、囃子はやし

問5 傍線部㊳「誠に我にはまさられたりけり」を現代語訳せよ。

問6 傍線部㊴「いかにかく当時のいきほひにはふつとかはりたるぞ」という嵯峨天皇の問いに対し、弘法大師はどのように回答したか。わかりやすく説明せよ。